HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	19.札幌管区気象台訪問ツアー他(国際オゾンシンポジウム-Sapporo 2000-報告)
Author(s)	藤原, 正智
Citation	天気, 48(8), 573
Issue Date	2001
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71616
Type	journal article
File Information	Tenki.2001.561.part.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

4，5）の報告では成層圏の気温が氷粒子の生成温度以下に低下した後に脱窒が起きたことを示した．しかしながら脱窒を引き起こす固体粒子がどのような機構を経て生成するのかは未だ明らかにされていないため，今後の議論が楽しみである．また，巻雲へのHNO_3の吸着は対流圏界面付近での窒素酸化物濃度を顕著に減少させると考えられていたが，2）の報告はそれを否定するものとなった．4年後に行われる次回のオゾンシンポジウムでは．これらについてさらに理解が深まっていることを期待したい．（入江仁士）

18. ポスターセッション

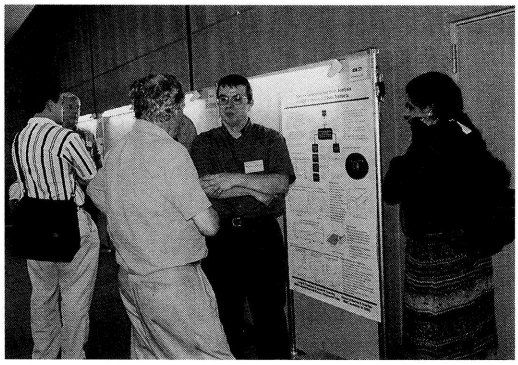
ポスターセッションは，口頭発表終了後，夕方5時半頃から1階のホールおよび第一会議室に設けられたポスター会場にて行われた（第2図）．水曜日のバンケットを挟んで，月・火と木・金の2日間ずつで前半と後半に分かれ，320件余りの発表があった．この他にも登録がうまくいかず，ポスターボードの割当のない人たちが空いているボードや壁を利用して発表していたので，総数はこれを上回ると思われる．

前半と後半とで極域におけるトレンド，観測・技術，対流圏オゾン，微量成分，オゾン化学，モデル，気候，紫外線などのトピック毎に分かれていたものの，各トピックにまたがるような内容も多く，満遍なく楽しめた人が多いのではないだろうか．全体的にオープンな雰囲気で，自分の専門にこだわらず，幅広く議論が広がっていたようだ．ただし，夕方のセッションだったこともあり，ビール片手にディスカッションするうちに盛り上がってそのまま夕食へ出かける，というパターンが多く，後半になると，説明者の数が減少して見えたのは気のせいだけではないだろう．

個人的には，今回，普段は顔の見えない海外の共同研究者らと顔を合わせることができたこと，他の学会にはほとんど出さないがオゾンシンポジウムでは毎回発表するという同業者と初めて会って細かい話ができたこと，そして，自分の発表した内容に興味を持ってくれた人と有意義な議論ができたことが大きな収穫であった．（白井知子）

19. 札幌管区気象台訪問ツアー他

4年に1度のオゾンシンポジウムが日本のしかも札幌で行われるということで，遠くからいらっしゃるオゾン研究者の方々をおもてなししたいと考えた．札幌はオゾンゾンデとドブソン分光光度計による長期観測データが蓄積されていることでオゾン関係者には有名な場所である．木曜日の午後に札幌管区気象台への見学ツアーを企画し，気象庁の佐々木　徹さんや北大地球環境の院生の方々とともに20人程の見学者を引率して出かけた．残念なことに曇天でオゾン全量測定が出来ないためオゾンゾンデ観測も中止となってしまった．それでも，皆熱心に観測システムを見学したり質問したり写真を撮ったりと，会議の合間のつかの間の時間を楽しんでおられたようであった（札幌管区気象台の皆様，どうもありがとうございました．）．



第2図　ポスターボード前での議論．

また，NASA/GSFCのAnne　Thompsonさんがリーダーをつとめるプロジェクト，SHADOZ（南半球追補オゾンゾンデ）は熱帯地域の10の観測地点（私が関わっているインドネシアのワトコセ観測所を含む）におけるオゾンゾンデ定常観測をサポートし組織するという計画であるが，今回7観測点の関係者が集合した．そこで，火曜日の昼に簡単な昼食会を催すことになり，9人の外国人を引き連れて海鮮レストランへ出かけた．全員の注文を決めるのには時間がかかったが，皆で楽しいひとときを過ごすことができた．

（藤原正智）

20. おわりに

蛇足になるが，今回の会議で実務担当幹事役を仰せつかり，国際会議を開催する側になった感想を一言述べたい．開催までにいろいろどたばたはあったが，やはり最後まで不安だったのは，一体何名が参加するかということであった．今回は経費節減，手作りシンポジウムを目指したが，参加人員の不確定さ，つまり予算の不確定が全ての準備に影響を与えた．最初の発表申し込みは予想以上であったが，事前登録者が予想よ